

## 会報が月報だった頃：EDITOR'S BOX から

馬本 勉

私が担当した号は、「月報」と呼んでいた頃の179号(2004年4月)、185号(2004年11月)～240号(2010年6月)、名前が「会報」と変わってからの241号(2010年8月)～256号(2013年4月)です。8年余りにわたり、73の号を編集した日々が随分遠い昔のように感じられます。

2004年3月、当時の月例会が初めて広島で行われました。その様子を伝える号は広島で編集をと任されたのが最初です。月報の編集後記にあたる**EDITOR'S BOX**の名は前任者から引き継ぎ、そのときどきの思いを綴りました。最初の号は、「初の広島例会、北は東北、南は九州から、多くの会員や一般参加の皆様がお集まりくださり、盛会裏に終えることができました」という言葉で始めています。

2004年度は会長が交代し、伊村元道先生から小篠敏明先生へ。新体制の役割分担が進み、11月の185号から正式に「月報編集部」を名乗りました。この号の末尾は「月報編集部が広島に移りました。皆様に愛される月報であり続けたいと思います。どうぞよろしくお願いします。(HB)」と締めくくっています。179号では「馬」としていた筆名は、185号以降は「HB」です。これがHorse Bookと気づいた方も多いたと思いますが、単純すぎるのでどこにも書かずじまいでした。

翌年の193号(2005年8月)の**EDITOR'S BOX**は「今回の月報は悲しいお知らせの号となりました」で始まります。6月末にお亡くなりになった伊藤裕道先生の追悼号でした。

**EDITOR'S BOX** ... 伊藤先生とは6月例会でお会いし、再会を期す固い握手を交わしたばかりでした。その後も病床からお手紙やお葉書を頂戴しました。... 学会を愛する気持ちと、私たち若手研究者への思い遣りに溢れるお言葉がたくさん綴られていました。「まだまだ言いたいことはたくさんあるんだ」という先生の静かな情熱が伝わってくるようでした。▼伊藤さん、僕にもまだまだ言いたいことはたくさんあったのですよ。こうやって僕がこの学会で研究を続けてこられたのは、伊藤さん、あなたのお陰です。... 6月例会での伊藤さんのご発表を伝えた前号を出したときは、「涙が出るほど嬉しかった」と喜んでくださいましたね。7月半ばに頂いた葉書の末尾には「同志へ！」と書いてくださいました。そのお礼もまだでした。これまで本当にお世話になって、その感謝の気持ちをきちんとお伝える前に、伊藤さんは旅立っていかれました。▼伊藤さんが命を懸けて取り組まれたお仕事の、ほんの僅かも担えませんが、僕はこれからもこの学会で、伊藤さんのお陰でライフワークにしようと思った英語教育史の研究を続けていきたいと思っています。どうか安らかに眠ってください。(HB)

220号(2008年6月)を「記念号」と呼びました。理由は「新しい体制がスタートしたことをお伝えする今号は切りの良い号数であったこと」「個人的に私は2が好きなので」と綴っています。この年はフェートン号100年に当り、全国大会は日本英学史学会と合同で秋に開催するため、5月は例会と総会を組み合わせ実施しました。会長は小篠敏明先生から竹中龍範先生へ。220号には「若手エッセイ」(榎本剛士氏)、「英語教育史フォルダ」という新企画が登場します。全12ページ。この号に限り全会員140名余りに郵送したため、印刷・発送に数日間を費やしました。その様子を綴ったブログ記事です。

【英学徒の隠れ家日記 (2008. 6. 3.) 「ゴールドフィンガーを支えるオロナイン」】

月に一度、右中指の腹をテカテカさせながら、紙を折る。今回はいつもの 5 倍の枚数。さすがのゴールドフィンガーもお疲れの様子。▼写真のオロナインは指に塗るためではない。折り目の仕上げに、折った紙 10 部程度をまとめて圧縮する。そのときにオロナインの容器（陶器か？）の曲面を押し付けて滑らせる。▼単 1 の乾電池がいいよ、と教えてくれた人があるが、僕はなぜかオロナインが手に馴染む。▼オロナインの容器で二つ折を終え、今度はそれを封入のために三つ折。ふたたびゴールドフィンガーの出番だ。ここから先は、オロナインによる押さえは無し。ひたすら折って、封筒に入れ、封をする。▼ふと、憑かれたように没頭している自分に気付く。さすがに疲れた。金、土、日、月と、かかりつきりだったな、と思いながら、ものすごく不安になる。▼かかりつきりになれなくなったら、どうしよう？



231 号 (2009 年 6 月) の **EDITOR'S BOX** は、Michael Jackson の訃報に触れたことで、翌年の『英語教育』増刊号 (2010 年 10 月) 「英語教育日誌」 (p.71) に伊村元道先生が引用していただきました。今、これを書きながら 3 曲を聞き返しています。

**EDITOR'S BOX** ... かつて “We Are the World” の DVD を手にしたとき、「この歌を英語のまま味わえることだけでも、英語を学んだ価値があるのでは」というようなことをメモに記した。学生時代に友人宅で初めて聴いたときは、大きなサイズのシングルレコードだったが、数年前に DVD を求め、何度も視聴した。この歌の中心には Michael Jackson がいる。これまで、どれだけの英語教科書がこの歌詞を掲載しただろう。中学や高校の英語の授業で出会ったという大学生も数多い。... ▼授業で洋楽を紹介すること多いが、取り上げたことのあるマイケルの曲は 3 つ。先の “We Are the World” と、“Heal the World”，そして “You Are Not Alone” ▼今週の授業で久しぶりに紹介しようと思い立ち、CD や DVD を引っ張り出してみた。自分の世界に引き込んで歌詞の解釈を試みながら、繰り返し聴く。自分ではない誰かの支えになろうとする歌の言葉は、心に響くが、ときに重い。ただ、その歌詞と向き合うとき、英語の学習を超えた何かを掴むことができるように思う。

2010 年 6 月に「月報」は最終号 (240 号) を迎えます。思えば私の 40 代前半は月報とともにありました。青春の思い出にひたりながら、これからの「会報」にエールを送りたいと思います。

**EDITOR'S BOX** これまで、月報は年間 10 号のペースで発行してきました。例会と全国大会の開催されない月が年に 2 回あるため、ときに一月以上の間隔が空くことはありましたが、やはり「月報」という名がふさわしい発行サイクルであったと思います。... これからは研究例会が隔月開催となり、それに合わせて「月報」も 2 ヶ月に一度、会員の皆様にお届けすることになります。次号より、名称も「月報」から「会報」へと変更します。▼これを機に、紙版の発送担当もバトンタッチすることになりました。紙と封筒と宛名ラベルを揃え、刷ったり折ったり貼ったりする作業は、私にとって今回が最後となります。月報担当を仰せつかった頃に比べると、紙版をお送りする先は半数以下に減りましたが、皆様のお顔を思い浮かべながら月報を折る作業は、月に一度の大切な時間でした。深夜の研究室で手を動かしながら、研究や会務についての着想を得たこともあります。ときに晴れない心をリセットしてくれたのも、この作業に没頭するひとときでした。